The Graduate School of Integrated Arts and Social Sciences
JOURNAL No. 14

人間社会研究科

紀要

第14号

心理療法の成果についての質的研究の可能性

Potential for Qualitative Research in Psychotherapy Outcomes:

青　木　みのり
Minori AOKI
（心理学科　准教授）

2008年3月
March 2008

日本女子大学
JAPAN WOMEN'S UNIVERSITY

心理療法の成果についての質的研究の可能性

Potential for Qualitative Research in Psychotherapy Outcomes:

青　木　みのり
Minori AOKI
（心理学科　准教授）

要　約
本稿では，心理療法に関する質的研究をレビューし，心理療法の成果に関する質的研究の可能性について論ずる。長年にわたって，心理療法の成果研究においては量的指標がおおむね用いられてきた。質的研究は，主観的で曖昧であるとされ，それゆえに成果研究には不適切とみなされ，プロセス研究にのみ用いられてきた。しかし，量的な指標が，クライエント一人一人のユニークな体験を正確に表すことができているかどうかは疑問である。もしクライエントの生活という文脈において，心理療法を受け，治癒することの意味を探求しようとするなら，質的研究が望まれるといえよう。そこで，心理療法の成果についての質的研究が必要性について述べ，さらには，例えばPAC（Personal Attitude Construction）分析のような個性記述的な手法について，考察を行う。
キーワード：心理療法の成果，PAC分析，質的研究，個性記述的分析

[Abstract]
In this article, the author has reviewed the qualitative studies of psychotherapy and suggested the potential research in predicting psychotherapy outcomes. For a long time, quantitative indices have been employed for research into psychotherapy outcomes. Because of its subjectivity and ambiguity, the qualitative research method is concidered as inappropriate for outcome research, and therefore has been employed only for process analysis. It is doubtful whether the quantitative indices can exactly represent the unique experience of every client. When we wish to investigate the reason and experience of attending psychotherapy and getting cured in the context of clients' lives, qualitative method becomes appealing. Therefore it is suggested that the qualitative method will be necessary for psychotherapy outcome research in the future. Furthermore, the potential of idiographic methods such as PAC (Personal Attitude Construction) analysis is discussed.

1．はじめに

心理療法を受けることで「よくなる」ということは，クライエントにとってどういう体験なのだろうか。クライエントが「よくなった」と感じたとき，最初の訴えはどう変わり，生活にはどんな変化が起きているのだろうか。

この問は筆者の10年来の問である。そして，クライエントにとって心理療法を受けることが

どのような体験であるかを知るためには，クライエント自身の視点からの探求が必要であると感じてきた。さらに，クライエントは一人一人がユニークな存在であり，その視点から心理療法を捉えるには，研究者によって枠づけられた質問紙法では限界があり，質的研究法が適していると考えられる（Hill, 2006）。

Hill（2006）は質的エビデンス研究の利点として，以下の6点を挙げている。①一人一人にとって異なるセラピーの体験を，クライエント個人の視点から詳しく知ることが出来る。②仮説検証的ではなく，仮説生成的であるため，研究者は予想の範囲を超えた結果を得ることが出来る。③複雑な現象について調べるには，量的研究よりも質的研究の方が適している。④データに接近した研究が可能になる。⑤手法的に臨床実践と類似し，体験を反映しているため，臨床家にとって利用しやすい結果が得られる。⑥研究者が提示した以外の方法で，実験協力者が自分自身の物語を語る余地が残されている。このように質的エビデンス研究はクライエントの体験に迫ることが出来る点に大きな特色があるといえよう。

そこで本稿では，心理療法に関する質的エビデンス研究の現況を概観するとともに，クライエントのユニークな体験の研究法として，個性記述的研究法の1つであるPAC分析に焦点を当て，その可能性を検討することを目的とする。

2．エビデンス研究における質的研究

(1) 歴史的経緯

Orlinsky, Ronnestad, & Willutzky（2004）によると，心理療法の成果（outcome）およびプロセスの研究は現在第四期を迎えているという。第一期は1950年代に始まったもので，その主な関心は科学的な研究の役割を確立することに向けられていた。第二期は1955～1970年で，セラピーのプロセスを客観的に観察することにより，科学的厳密さが追及された時期であった。第三期は1970～1985年であり，拡張，差別化，組織化という特徴が見られた。この時期主流となったのは客観的で，量的で，さらには実験的な研究であり，NIMH（National Institute of Mental Health）が行った鬱に関する調査はよく知られている（Elkin et al., 1985）。また，メタ分析が登場し，心理療法の効果の大きさが議論された。そしてプロセス分析の領域では，Greenbergらが，ランダムサンプリングによらず治療的に重要なイベントを分析するという経験的（experiential）手法によるタスク分析を提唱し（Rice & Greenberg, 1984），関係性の重要性が再認識された。

そして1985年以降の第四期は，統合化，標準化，精緻化，そして根本的から問い直す批判，革新，論議を交えた，パラドキシカルな性質を持つとOrlinsky, Ronnestad, & Willutzky（2004）は述べている。統合の一例として，NIMHの鬱の治療プログラムが挙げられる（Elkin, 1994）。この研究はrandomized controled trial，特定の診断基準を満たすクライエント，マニュアルにより統一され絶えずその適合性がチェックされる治療，という標準化された手法のモデルを呈示している。さらに洗練され進化した分析法として階層線形モデルが導入され，精緻化が実現した。

こうした主流派に対し，成果の評価法およびセラピーのプロセス分析手法の両面において，異なる流れが起こっている。前者については，Howardらによるpatient-focused research（Howard et al., 1996）があり，クライエント個人に適したセラピーを，階層線形モデルをはじめとする統

計的手法を用いて，グループ間の比較によってではなく個性記述的に究明することが目指されている。そして後者については，今までにない質的研究やナラティブの分析への関心の高まりという革新的な特徴が見られる。

以上の指摘はOrlinsky, Ronnestad, & Willutzky（2004）によるものであるが，これらをまとめると心理療法研究の現状は，標準化の方向性と，それへの批判から生まれた個性記述的・質的研究の高まりであるといえよう。その背景のひとつとして，特定の療法が他に比べてより効果的であるという結果は見出されなかった（Lambert & Bergin, 1994）ことや，そこから治療の共通要因が研究され，治療者と患者との関係性や協働関係が重要とみなされるようになったことが考えられる。関係性は個々のケースに特有の要因であるため，「ある治療者が，ある患者に対して成果を上げられつつあるか」についての個性記述的な研究が求められるようになった（Lambert & Okiishi, 1997）のである。

(2) 質的研究の位置づけ

心理療法の質的研究は，近年急速に発展しつつあり（Orlinsky, Ronnestad, & Willutzky, 2004; Hill, 2006），代表的な研究法としてグラウンデッド・セオリー・アプローチ（Strauss & Corbin, 1998），現象学的手法（Georgi, 1985），包括的プロセス分析（Comprehensive Process Analysis＝CPA; Elliot, 1989），合意による質的研究（Consensual Quality Research＝CQR; Hill, Thompson, & Williams, 1997））などが挙げられる（Hill, 2006）。これらの研究の焦点はおおむね，セラピー中のクライエントおよびセラピストの体験に当てられている。

① クライエントの体験に焦点を当てたもの

面接中の体験（Rennie, 1994a），面接中の重要なイベント（Elliott et al., 1994），セッション中の重要なイベント，その理由，セッション中に考えたこと，経験した変化（Cummings, Hallberg, & Slemon, 1994），セラピー中に解明できたこと，出来なかったこと（Rhodes, Hill, Thompson, & Elliott, 1994），問題のある反応の解明（Watson, & Rennie, 1994），面接の中でストーリーテリングを行うことの主観的体験（Rennie, 1994b），治療同盟（Bachelor, 1995），セラピストの自己開示が助けになった場合のクライエントの経験（Knox, Hess, Peterson, & Hill, 1997），秘密保持に関する自己報告と，症状との関連（Kelly, 1998），セラピストの内的表象（Knox, Goldberg, Woodhouse, & Hill, 1999），および夢もしくは喪失への焦点付けの体験（Hill et al., 2000）などが挙げられる。

② セラピストの体験に焦点を当てたもの

初回面接における成功（Frontman, & Kunkel, 1994），セラピーの中断につながるような治療上の行き詰まり（Hill, Nutt-Williams, Thompson, & Rhodes, 1996），逆転移（Hayes, McCracken, McClanahan, Hill, Harp, & Carozzoni, 1998），マスターセラピストの面接や仕事における体験（Jennings, & Skovholt, 1999），クライエントからの贈り物への対応（Knox, Goldberg, Woodhouse, & Hill, 1999）などがある。

③ クライエントとセラピストの両方の体験に焦点を当てたもの

面接の中で扱われるメタファーの意味（Rasmussen & Angus, 1996）などがある。

以上の研究の対象および分析方法をTable 1に示す。これらは質的エビデンス研究の全てでは

Table 1　質的エビデンス研究

対象	研究	質的分析法	テーマ
クライエント	Rennie (1994a)	GDA	面接中の体験
	Elliott et al. (1994)	CPA	重要な面接中のイベント
	Cummings, Hallberg, & Slemon (1994)	CQR 的	セッション中の重要なイベントとその理由，思考，変化
	Rhodes et al. (1994)	CQR 的	セラピー中に解明できたこと，出来なかったこと
	Watson & Rennie (1994)	GDA	問題のある反応の解明についてセラピー中に生起した重要な瞬間
	Rennie (1994b)	GDA	ストーリーテリングの主観的体験
	Bachelor (1995)	現象学的	治療同盟
	Knox, Hess, Peterson, & Hill (1997)	CQR 的	セラピストの自己開示が助けになった場合のクライエントの経験
	Kelly (1998)	CQR 的	秘密保持に関する自己報告と，症状との関連
	Knox et al. (1999)	CQR	セラピストの内的表象
	Hill et al. (2000)	CQR	夢および喪失への焦点付けの体験
セラピスト	Frontman & Kunkel (1994)	GDA	初回面接における成功
	Hill et al. (1996)	CQR 的	セラピーの中断につながるような治療上の行き詰まり
	Hayes et al. (1998)	CQR	逆転移
	Jennings & Skovholt (1999)	inductive analysis	マスターセラピストの面接や仕事における体験
	Knox, Hess, Williams, & Hill (2003)	CQR	クライエントからの贈り物
両方	Rasmussen & Angus (1996)	GDA	メタファーの意味

註）GDA＝グラウンデッド・セオリー・アプローチ，CPA＝包括的プロセス分析，CQR＝合意による質的分析，　CQR 的＝CQR と明記されていないが類似した手法，を表す。

ないが，現在の主な動きをある程度現わしているといえよう。

Table 1 から，心理療法の質的研究の対象は，おおむね「面接中に何が起こったか」というプロセスであることがわかる。反面，「面接の結果として起こった変化」すなわち成果（outcome）についての研究はほとんど見られない。面接が効果的であることを示すためには，面接のプロセスはその成果との関連で検討される必要があり（Greenberg & Watson, 2006），上記のプロセスを対象とした質的研究においても成果の測定は行われているが，その指標にはいずれも量的なものが用いられている。

Hill & Lambert（2004）も，質的研究の対象となるのはほぼプロセス研究に限られると述べている。その理由は，成果研究における指標は①計られているものが何かが明確で，再現可能である②複数の尺度から構成され，多面的な視点から変化を捉えられる③症状に対応し，特定の臨床理論に縛られない④ある程度の期間の変化のパターンを捉えられる，という 4 条件を満たすものが望ましいとされるからである。そのため量的指標である BDI，SCL-90 などがよく用いられてきた。ロールシャッハや TAT などの投影法は，伝統的に用いられてきた査定法であるにも関わらず，その計量性の乏しさや時間がかかることを理由に望ましくないとされてきたと Hill & Lambert（2004）は指摘している。

質的エビデンス研究の課題点として Hill（2006）は，①様々な研究を関連付けることが困難である。②評定者が自身のバイアスに基づいてデータを解釈しており，実験協力者と評定者の視点を区別することが困難あるいは不可能である。③結果を一般化することが難しい。④回想法を用いることで，記憶の変容のために実際の体験と異なる報告がなされる可能性がある。の 4 点を挙げている。こうした点は確かに Hill & Lambert（2004）の挙げる望ましい成果研究の条件に適合しないといえるだろう。

(3) 心理療法の成果に関する質的研究の可能性

だが冒頭の筆者の問に戻ると，心理療法を受けたことがクライエントにとってよかったといえるかどうかを知るために，これまで指標とされてきた症状の消失や社会的機能の向上によってのみ計られるもので十分といえるだろうか。むしろそうした指標が変化した時に，クライエントの生活や世界観がどのように変化するかという視点からの考察が必要となるのではないか。東（1993）は，症状は軽減したが夫との関係が悪化し離婚に至った婦人の症例を挙げ，「症状を消すことなど，いつでも出来る。大切なのは，その人の人生を見ることだ」と述べている。

また，Talmon（1990）は，中断したクライエントについての調査をレビューし，十分な援助が得られたと思ったために治療に戻らなかった者が多数存在すると指摘している。よって治療者側の理論的枠組みや改善の基準とは無関係に，クライエントは主観的によくなったと判断し行動しているといえる。

このように心理療法がクライエントの生活に与える影響は複雑である。Hill & Lambert（2004）も，客観的な指標の標準化を望ましいとする一方で，夥しい種類の質問紙が思い思いに用いられている混沌とした現状が，心理療法の複雑さや多義性を反映していると認めている。そして成果の大きさは定義の仕方によって大幅に変わることを指摘している。

このように考えると，「成果の測定法として何が適切か」という問には，「何をもって成果とす

るか」，という根源的な問が含まれているといえる。上述の量的指標は，症状の消失や社会的機能の回復を成果とする考え方から生まれており，そのコンテクストとして，ただ1つの真実が存在することを前提とし，その究明を目指すモダニズム的認識論が横たわっていることが考えられる。

しかし，1980年代以降に台頭し，家族療法をはじめとする心理療法の世界に多大な影響を与えたポストモダニズム的認識論では，量的指標による成果の計測も複数の視点の1つに過ぎず，ただ1つの絶対的な真実とはいえないことになる。この考えに従えば，治療者とクライエントそれぞれが各自の枠組みで，治療の終結の意味を捉えているという考えも許容しうる。そこで1つの可能性として，心理療法の成果を症状の改善にとどまらず，クライエントの生活やその後の人生への影響，およびその意味付けという観点から捉えることができるだろう。さらには，ポストモダニズム的な多次元の視点によれば，このように生活という文脈の中でクライエントの視点から治療や治癒を捉えることも，治療者側の視点を否定することにはならず，Hill（2006）が指摘するように，むしろそれらを複合して新たな意味を生成する可能性につながると考えられる。

このような方向性では，尺度によって計測される症状や社会的機能のみを指標とするだけではなく，クライエントにとっての症状の改善の意味をも考慮する必要がある。よって，プロセス研究のみならず心理療法の成果においても，質的研究の潜在的可能性があるといえよう。

3．個性記述的分析法としてのPAC分析の適用について

今まで述べてきたように，質的エビデンス研究では，その仮説生成的な性質から研究者の枠組みにとらわれない結果や，複雑な事象の記述など，量的研究では得られない貴重な成果が得られることがわかった。しかし，多くの人々から得られたデータの抽象化を目指し，バイアスをいかにゼロに近づけるかに力点が置かれている点では，量的研究と同じであるといえる。そこに描かれているのは，人々の経験のエッセンスであって，ユニークな個人のユニークな経験を表現しているのではない。

だが心理療法を受けたことがクライエントにとってどのような意味を持つかを考えるとき，一人一人がユニークな存在であるクライエント個人の変化を扱うこともまた重要である。Lambert & Okiishi（1997）も，個性記述的な研究の意義について述べている。ある個人にとって，自分の受けた心理療法が有効であったかどうかは，その個人の視点から検討されることによって，より明確になる。

(1) PAC分析とは

PAC分析（Personal Attitude Construction Analysis：個人別態度構造分析；内藤，2002）は，自由連想法とクラスター分析による質的分析法であり，一人一人がユニークな個人であるクライエントが抱く治癒のイメージの構造を明らかにすることに適していると考えられる。

内藤（2002）によると，PAC分析の手順は，以下のようになる。被験者に，ターゲットとなる事柄についての連想刺激を教示として与え，その事柄についてのイメージを，自由にカードに書き入れてもらった後，被験者自身にとっての重要度に従い，項目を並べ替えてもらう。次にそ

の連想項目間の類似度を，数字によって評定してもらい，その評定値を入力としてクラスター分析を行う。その後，被験者自身に樹形図の解釈，クラスターの命名，クラスター間の関係や各項目のプラスマイナスイメージの報告などしてもらう。総合考察は，以上の被験者による考察を踏まえ，実験者が行う。

このようにして得られた樹形図とその構造への解釈は，個人の態度の構造を明らかにする点で，優れて個性記述的であるといえる。

(2) PAC 分析の機能

井上（1998）は，PAC 分析のカウンセリング導入への効果を，ヴィゴツキーの用語にならい 3 つの領域，11 の機能に分類して整理している。第一の直接的精神間機能分野は，1 対 1 のカウンセリングの場におけるカウンセラーとクライエントの関係に着目した分野であり，導入促進機能，自己開示促進機能，信頼感形成機能，対話発展機能，の 4 機能に分類される。第二の精神内機能分野は，クライエント自身の精神世界とその変化に着目した分野であり，共有知識的理解機能，明確化機能，自己理解促進機能，カウンセラー気づき機能，の 4 機能に分類される。第三の間接的精神間機能分野は，クライエントの内的世界を，第三者にも理解可能な形で提示する，客観的なデータ・資料・査定・評価の道具，いわゆる心理テストの一種としての機能であり，記述記録機能，実務説明機能，評価査定機能，の 3 機能に分類される。

このように被験者自身にとっての内省やカウンセラーの気づきを促し，良好な関係の育成を促進し，さらには被験者の内界を描き出し，アセスメントする機能をも備えていることから，PAC 分析自体にカウンセリング的機能があると考えられている。

本研究は心理療法の成果を査定することについての考察であるため，特に第三の間接的精神間機能に焦点を当てる。このうち記述記録機能とは，個の主観的世界を客観的に記述し記録することができる効果である。実務説明機能とは，関係者へのコンサルテーションの資料として，クライエントの現状を説明する機能である。評価査定機能とは，クライエントの内的世界がカウンセリング開始時から終結時の 2 時点でどのように変化したかについて，いわば事前・事後テスト的に PAC 分析を用いてカウンセリングの効果を測定・評価する機能である。

(3) PAC 分析を事前・事後テストとして用いた研究

心理療法の成果の査定においては，クライエントの変化を見るために事前・事後のテスト結果の比較が必要と考えられるため，上記の様々な機能の中でも，評価査定機能が特に重要といえる。そこで，PAC 分析の研究の中でも，事前事後テストとして PAC 分析を用いたものについて，以下に検討する。

① 心理療法における変化

PAC 分析を心理療法による変化を扱ったものは，それほど多くはない。その中で井上（1997）は，異文化カウンセリングにおいて，クライエントの留学生を対象として，カウンセリングの最初と最後のセッションで PAC 分析を行っている。それによると，まず最初の PAC 分析では，被験者の態度構造は 4 つの異文化受容態度のうち，「統合」から「分化」へのプロセスを示しているという。マイナスの項目も見られ，文化的適応を目指しながらも，自己と日本社会との関係が

うまく行っていない状態におかれ，日本人との違和感を感じ，異邦人意識が高まっている。それに対して最後のPAC分析では，全ての項目が＋か中立となり，人間関係と自己の成長の2つのクラスターが結びつき，「統合」へと移行していることを見出している。

また矢野（1999）は，不妊相談にPAC分析を導入し，カウンセリングへのPAC活用の効果を検証している。事前・事後ではなく4回の面接そのものがPAC分析であり，またカウンセリングの一部として行われている。その中で，各時点でのPAC分析の結果から，相談者の態度構造を比較し，相談の進行にともなう相談者の態度の変化を見ることができる。また，量的な指標として，日本版POMSを並行して用いており，感情状態と関連付けて態度のありようを検討することを可能にしている。

4回のPAC分析の結果，初回は，流産の悲嘆のプロセスの状態，2回目には検査を受けて今後の治療法について検討する状態，3回目には，夫との関係や将来計画を視野に入れた状態，そして最終回の4回目には，職場や対外的なことも含めて考えている状態が示されている。相談の進行に伴う相談者の態度の経時的な変化を，構造的・図式的にとらえているといえるだろう。

松崎（1997），松崎・田中（1998）は不登校など何らかの心理的な問題を抱えた子どものための合宿において，参加した子ども自身や母親から見た子ども，あるいはスタッフの自己イメージの変化を捉えている。これは個人を対象とした心理療法ではないが，臨床心理的活動，あるいはメンタルヘルスケアという枠組みの中で，悩みを抱えた個人の変容を描き出しているといえる。ある一人の母親から見た子どものイメージについての分析では，合宿前には存在感を感じられず母親にしがみつき，問題に対処しきれず母親を巻き込みながらも，気持ちをわかってもらえない状態であったことが伺える。それが合宿後には，背伸びせずに等身大で生活し，主体性を獲得していき，母親もそれに自然に応じられている様子が示されている。また，合宿の前後で，プラスイメージが増加し，マイナスイメージが減少していることからも，事態が改善したと受け取られていることがわかる。

②　教育場面における変化

教育場面での教師および生徒の変化を扱ったものがいくつか見られる。まず安ら（1995）は，韓国人日本語学習者の授業観について，教師あるいは研究者の視点だけではなく，学ぶ主体としての学習者が認識する教授・学習過程を分析することにより，教師・学習者という双方の参加者による授業観を検討している。成績上位者2名と成績下位者2名に対し，研修開始1週目と5週間の研修終了後の2回にPAC分析を行っている。

その結果，まず成績上位者・下位者ともに，前後でPAC分析の項目数が減っていることから，授業をとらえる準拠枠が整理されていることがわかった。また，成績上位者に関しては，開始時には学習者としての視点からのみ授業を見る準拠枠であったが，終了直後には，学習者と教師との相互作用として授業を認識する準拠枠に変化している。一方下位者に関してみると，一人の下位者では，授業に対する批判的な態度には変化は見られなかったが，授業のイメージが一般的なものから研修での経験に基づいたものに変化し，依存的な態度も見られなくなっていた。しかしもう一人の下位者では，教師への依存的な態度に大きな変化は見られなかった。

このような変化を一般化することはまだできないが，今後の実証研究の重要な仮説になると考えられる。

藤井（2004）は，一名の養護学校新任教師（20代・女性）を被験者とし，指導に困難を感じていた子ども（Aさん）との関わりについて，2学期開始時と3学期終了時の2回，PAC分析を行い，その結果を比較している。その間，被験者は藤井に対してAさんへの対応について相談をしており，藤井はそれに対して「被験者がAさんとかかわる中で感じとったことや理解したことを語ってもらい，それらを基礎とした筆者との語り合いの中でAさんへのかかわり方に気づき，指導方法について主体的に問題解決をしていってもらえるような方法」で関わろうとしていた。2度のPAC分析の結果の違いは，このような関わりによる影響をも含めたものといえる。

藤井は児童の実態把握の妥当性が授業そのものの成否を規定するほどに重要であること，にもかかわらず初心者においてはその方法が明確でないために不安を招きやすいことを述べている。そして，2度のPAC分析の結果を比較し，子どもの実態把握の枠組みが変化したこと，そのことに被験者である教師が自覚的になっていること，そのような自己評価の方法としてPAC分析が機能したことを挙げている。そして，自己リフレクションの機能を持つPAC分析は，自己研修法としての可能性を持つとしている。

友生は，教師としての立場から，児童の自己概念と学級適応との関係について一連の研究を行っている。その中で，友生・今林（2001）は，自己概念に他者との比較による自己査定が加わり始める児童期中期において，友人関係を児童がどのようにとらえているのかを，学級全体への質問紙調査と，一人の児童に焦点を当てた質的分析の両面から行っている。質問紙調査では，自己概念，学校適応感，ストレスについての尺度が使用されている。質的分析においては，観察者の主観によらず本人の視点から明らかにするために，一学期終了時点（7月）と学年終了時点（3月）の2回にわたってPAC分析を行い，比較検討している。被験者は4年生の女児1名で，どちらかというと友人を作るのがあまり得意ではなく，担任教師はさまざまな教育活動を通してこの女児が学級になじめるように働きかけている。2回のPAC分析ではいずれも，3つのクラスターを析出しており，各クラスターが友達との関係のタイプを示している。それらの比較から，2つの時点で友達との関係が変化していることが理解される。

友生・今林（2002a）ではさらに，同一の被験者が5学年に進級してからの継続したPAC分析が9月，3月の2回にわたって報告されている。それによると，女児の友達は4年生のときから仲のよい核となる友達を中心として，クラスメート全体や，男子にも広がっていることがわかる。そして，9月には自分の感情を表現できる関係，3月には相手のネガティブな面にも目を向け統合することができる関係へと発展していることが明らかにされた。

そして友生（2002b）では，友生（2002a）と同一のデータに対して，クラス編成が児童個人の内面に及ぼす影響という点から変化を考察し，学級指導の際の参考としている。

これらの研究では，各クラスターに現れた，友達との関係についてのイメージを，時系列で比較することができ，児童の自然な成長と，教師をはじめとする周囲との相互作用による変化を，児童の視点から描き出すことに成功している。

③　そのほかの変化

郷式（2003）は，三名の被験者を対象として，出産の前後でPAC分析を行い，赤ちゃんに対するイメージや母親自身のことがどれくらいの重みや構造を持っているかを，PAC分析を用いて検討している。母親は生来的に母性を備えているわけではなく，妊娠・出産・育児という過程

において発達する存在である。従来のインタヴューによる構造化されていない研究と異なり，構造の変化に注目している。そして，3事例における出産前後の変化として，「出産前から持っている，『可愛い』というイメージをもちながら，自分の体験や観察にあわせて修正して行っていること」「出産前後に共通して，肯定的要素と不安という2部に分かれるが，全体を肯定的イメージでバランスをとろうとしていること」を見出している。

内藤（1993）は，就職活動を行った学部4年生の男女5人の被験者に対し，年度当初（4，5月）と年度末（2，3月）の2回に，職業や就職のイメージについてのPAC分析を行い，被験者ごとに2時点の比較を行い，態度の変化について考察している。そして，態度の構成要素と構造それぞれにおいて，各人ごとに特有の変化が見られることを示している。

各被験者ごとの変化をまとめると，まず，女子Aにおいては，第一回では就職活動や職業についてのイメージの各側面が構造化されていたのに対し，第二回では就職によるプラスとマイナスの各側面が明瞭に構造化・意識化されている。女子Bにおいては，第一回では就職情報からの情報と自身が直面したイメージとが構造化されていたが，第二回では就職直前の期待と不安，現実の厳しさの予測による構造へと変化している。男子Cでは，第一回では就職によって大人になるという面と，マイナス面の覚悟という2つの部分から構成され，第二回では身近に迫った時点から最も遠い研修まで，時間順に構造化されている。男子Dでは，第一回では就職で配慮すべき点と具体的な活動に際して起きそうなことの2つのイメージで構成され，第二回では，会社での研修や周りの人のお祝いなどで，企業の一員としての実感を得ていることが現れている。大学院進学希望者である男子Eでは，第一回では同級生の様子などから不安を覚えながらも，就職に対してのイメージはかなり貧弱であるのに対し，第二回では，研究者としての将来に決意と不安を覚えている様子が描き出されている。

(4) 描き出される変化

以上みてきたように，PAC分析の大きな特徴として，ユニークな個人のユニークな体験を，詳細に描き出すことが出来る点が挙げられる。そこで事前・事後テストとして使用することで，具体的にどのような変化を描き出すことができるかについて以下に考察する。

① イメージの構造

PAC分析は体験やイメージを構造として描き出し視覚的に示すことが出来るので，構造を比較することが可能になる。

1）連想項目数の変化

連想項目は，最初の実験協力者による自由連想から得られるものであり，この段階で項目の数が意味するものは多様である。一例として，PAC分析への動機づけが低かったり，連想の対象に対する興味が薄かったり，或いは，あまり気にかけなくなっている，といった場合には項目数が少なくなる傾向がある。よって項目数の変化により，実験協力者の動機づけ，連想対象への距離感やとらわれの一端をうかがい知ることが出来る。

2）クラスターごとの比較

友生・今林（2001）は，子どもが友人関係をどのように捉えているかについてのPAC分析の中で，各クラスターが友達との関係のタイプと対応していることを見出している。このように，

各クラスターが同一レベルに属するカテゴリーを形成していることもあり，実験協力者が他者や自分の住む世界を分類して見ていることや，その内容を知る手がかりになる。

また，青木（2003）は教師コンサルテーションの事例において，子どもに対するイメージがコンサルテーション前後において同一の「自分の感情」「相手への感情」「教師としての自分の立場」というヒエラルキー構造を示すこと，さらに対応する各層のイメージがネガティブからポジティブに変化していることを示した。このように各クラスター間の関係が同一レベルではなくヒエラルキーを示すこともある。なおこの研究は，事後の想起であるために今回事前・事後テストとしては取りあげなかった。

3）クラスター構造，クラスター同士の関係の変化

内藤（1993）による就職活動への態度変容に関する研究では，就職活動を通じて，あるいは実際に就職が近づくことにより，クラスターの構造やその関係が変化することが示されている。5人の調査協力者に共通しているのは，最初はイメージとして描く就職や，現在の学生生活の中での就活の大変さであり，やがてそれが現実に将来に向かっての準備状態や不安・覚悟・期待へと変化する点である。しかしどのような変化が生まれるかは一人一人違っていることが，複数被験者の比較によりあらためて浮かび上がる。

例えば女子Aは，年度始めには就活の始まった現実生活に適応するプロセスで，それぞれの局面が構造化された状態から，年度末には就職のイメージのプラスマイナスそれぞれの側面が構造化され明確になっていることがわかる。一方女子Bでは，年度当初に就職＝学生生活との決別を惜しむクラスターが含まれ，年度末には期待とともに不安，厳しさや責任への予測が構造化され，こうした情緒面での構えが強い状態であることが伺える。また男子Cでは，年度当初は就職に対し大人になることとそれに伴う不安が構造化され，年度末には将来に向かって時間的な展望が構造化されている。見知らぬ社会に不安を抱きながらも，しなければならないことをこなしていく堅実で慎重な態度が構造に現れている。男子Dは，全体の構造として就活に対する具体的な対処法をイメージしている状態から，社会の一員としての様々な局面が構造化される状態へと変化している。おおむね就活と就職に前向きな態度が，全体的に現れている。

郷式（2003）も，3名の母親を対象として赤ちゃんのイメージについてのPAC分析を行い，その構造の変化に注目している。そこでは，母親が出産前から出産後にかけて現実的な適応をし，出産後の赤ちゃんへのイメージにおいてもプラスマイナスのバランスをとろうとしている点で，共通した傾向が見られながらも，その一人一人がユニークなイメージ構造を持ち，適応のしかたやバランスの取り方も人それぞれである点が見出されている。

このようにイメージがクラスターの内容や構造として現されることにより，全体に共通する要因が見出されると同時に，個人の変化をユニークに捉えることが可能になるといえる。

4）全体としての態度構造の比較

井上（1997）は文化的受容態度の，また矢野（1999）は不妊相談における態度の，変化を示している。これらは樹形図全体の構造から，心理療法におけるクライエントの態度の変容を明らかにしている。さらに矢野（1999）は相談内容の性質からか，その人の存在のありようそのものの変化とも呼べるような深いレベルでの変容をも描き出すことに成功している。またこのような描写を，クライエントの意識レベルには現れないものも扱えるPAC分析が促進する役割を果たし

ていることは，井上（1998）が指摘したとおりである。

安ら（1995）や藤井（2004）が述べるように，構造は，その人の準拠枠を表していると考えることもできる。これら2つは教育場面における変化の研究だが，準拠枠として捉えることは，主に認知面における変化に焦点を当てて検討することを可能にし，教育の効果をつぶさに表現することができる。

② 項目のイメージの符号の検討

松崎（1997），松崎・田中（1998）は不登校児の合宿の前後の比較を行っているが，その際にプラスのイメージが増え，マイナスのイメージが減ることを見出している。これはやはり，調査対象者のとらえかたが変化し，「よくなった」と感じられていることを示しているといえよう。心理療法における改善をとらえるには，これは重要なポイントであるといえる。

③ 実験協力者自身による解釈

このような前後のイメージの変化が，ともに実験協力者自身によって分析される点が，PAC分析の大きな特徴の一つでもある。内藤（2002）が述べるように，項目やクラスター，およびクラスター間の関係の意味は，実験協力者自身でなければわからないことも多い。そしてむしろそのような領域にこそ，実験協力者のユニークな世界観への入り口が示されていることも少なくない。それを尊重することによって，PAC分析の特長を大きく活かすことができると考えられる。そして，実験協力者のユニークな世界観に対して実験者が総合考察を行うことによって，第三者的理解という光が当てられ，理解に深みと幅が生まれるのである。

(4) 態度変容の質的分析に向けて

態度構造の変化を質的に分析する技法としてPAC分析が有効であると内藤（1993）は述べている。個人の態度を個性記述的に分析できる点がPAC分析の大きな特徴であることを考慮すると，客観性あるいは再現可能性の名の下に安易に類型化を試みることには慎重でありたい。しかし，クラスター構造やプラスマイナスイメージに代表されるような，単なる事例記述にはない比較可能性な性質を有していることを考えると，それらを比較し変化を描き出すための視点を整理し，可能ならばガイドラインの作成を目指すことは有意義であるといえよう。

4．まとめ

以上，心理療法を受けるクライエントにとって，「よくなる」とはどういうことか？という問に始まり，その研究法としての質的エビデンス研究とPAC分析に焦点を当てて論じてきた。その結果，質的エビデンス研究においてはクライエントの視点を捉えることが出来る点が重要であり，PAC分析においてはそれに加えてクライエントのユニークな経験を捉えることが出来る点が重要であることが見出された。さらに，PAC分析においてはクライエントの変化を捉えるための視点の整理を行うことが有効であることが提言された。

今後，より充実した心理臨床サービスを提供するために，セラピストの視点とクライエントの視点を複合的にとらえ，より多角的な視点からの評価を行うことを目指して行きたい。

[文献]

安龍洙・渡辺文夫・才田いずみ（1995）韓国人日本語学習者の授業観の分析：授業に対する認知的変容についての事例的研究．東北大学文学部日本語学科論集 5，1-12．（東北大学）

青木みのり（2003）教師コンサルテーションの一事例に関する考察～問題解決過程を通じての自己概念および指導行動の変容のプロセス．専修人文論集，73，1-27.

Bachelor, A. (1995) Clients' perception of the therapeutic alliance: A qualitative analysis. *Journal of Counseling Psychology*, 42, 323-337.

Cummings, A.L., Hallberg, E.T., & Slemon, A.G. (1994) Templates of client change in short-term counseling. *Journal of Counseling Psychology*, 41, 464-472.

Elliot, R. (1989) Comprehensive process analysis: Understanding the change process in significant therapy events. In M.J. Packer & R.B. Addison (Eds.), *Entering the circle: Hermeneutic investigations in psychology*, 165-184. Albany: State University of New York Press.

Elliott, R., Shapiro, D.A., Firth-Cozens, J., Stiles, W.B., Hardy, G.E., Llewelyn, S.P., & Margison, F.R. (1994) Comprehensive process analysis of insight events in cognitive-behavioral and psychodynamic-interpersonal psychotherapies. *Journal of Counseling Psychology*, 41, 449-463.

Elkin, I. 1994 The NIMH treatment of depression collaborative research program: Where we began and where we are. In S.L. Garfield & A.E. Bergin (Eds.), *Handbook of Psychotherapy and Behavior Change* (4 th ed. 114-142.). New York: Wiley.

Elkin, I., Paloff, M.B., Hadley, S.W., & Autry, J.H. (1985) NIMH treatment of depression collaborative research program: Background and research plan. *Archieves of General Psychiatry*, 42, 305-316.

Frontman, K.C., & Kunkel, M.A. (1994) A grounded theory of couselors' construal success in the initial session. *Journal of Counseling Psychology*, 41, 492-499.

藤井和子（2004）PAC 分析を利用した養護学校新任教師の自己研修法の検討．上越教育大学研究紀要，24，89-97.

Giorgi, A. (1985) Sketch of a psychological phenomenological method. In A. Giorgi (Ed.), *Phenomenology and psychological research*. (pp.8-22). Pittsburgh, PA: Duquesne University Press.

郷式薫（2003）母親は赤ちゃんをどうイメージするか？：出産前後の PAC 分析の変化．人間文化研究科年報，19，163-180．（奈良女子大学）

Greenberg, L.S., & Watson, J.C. (2006) Change process research. In J.C. Norcros, L.E. Beutler, & R.F. Levant (Eds.), *Evidence-Based Practices in Mental Health: Debate and Dialogue on the Fundamental Questions*, 81-89. Washington: APA.

Hayes, J.A., McCracken, J.E., McClanahan, M.K., Hill, C.E., Harp, J.S., & Carozzoni, P. (1998) Therapist perspectives on countertransference: Qualitative data in search of a theory. *Journal of Counseling Psychology*, 468-482.

東　豊（1993）セラピスト入門．日本評論社.

Hill, C.E., Nutt-Williams, E., Thompson, B., & Rhodes, R.H. (1996) Therapist retrospective recall of impasses in long-term psychotherapy: A qualitative analysis. *Journal of Counseling Psychology*, 43, 207-217.

Hill, C.E., Thompson, B.J., & Williams, E.N. (1997) A guide to conducting consensual qualitative research. *Counseling Psychologist*, 25, 517-572.

Hill, C.E., Jason, S.Z., Wonnell, T.L., Hoffman, M.A., Rochlen, A.B., Goldberg, J.L., Nakayama, E.Y., Heaton, K.J., Kelly, F.A., Eiche, K., Tomlinson, M.J., & Hess, S. (2000) Stuctured brief therapy with a focus on dreams or loss for clients with troubling dreams and recent loss. *Journal of Counseling Psychology*, 47, 90-101.

Hill, C.E., & Lambert, M.J. (2004) Methodological issues in studying psychotherapy process and outcome. In

M.J. Lambert (Ed.), *Bergin and Garfield's Handbook of Psychotherapy and Behavior Change* (5 th ed. 84-135). New York: Wiley.

Hill, C.E. (2006) Qualitative research. In J.C. Norcros, L.E. Beutler, & R.F. Levant (Eds.), *Evidence-Based Practices in Mental Health: Debate and Dialogue on the Fundamental Questions*, 74-80. Washington: APA.

Howard, K.I., Moras, K., Brill, P.L., Martinovich, Z., & Lutz, W. (1996) The evaluation of psychotherapy.: Efficacy, effectiveness, and patient progress. *American Psychologist*, 51, 1059-1064.

井上孝代（1997）留学生の文化受容態度とカウンセリング：PAC分析による事例研究を通して．カウンセリング研究．30，216-226.

井上孝代（1998）カウンセリングにおけるPAC（個人別態度構造）分析の効果．心理学研究，69，295-303.

Jennings, L., & Skovholt, T.M. (1999) The cognitive, emotional, and relational, characteristics of master therapists. *Journal of Counseling Psychology*, 46, 3-11.

Kelly, A.E. (1998) Clients' secret keeping in outpatient therapy. *Journal of Counseling Psychology*, 45, 50-57.

Knox, S., Hess, S.A., Peterson, D.A., & Hill, C.E. (1997) A qualitative analysis of client perceptions of the effects of helpful therapist self-disclosure in long-term therapy. *Journal of Counseling Psychology*, 44, 274-283.

Knox, S., Goldberg, J.L., Woodhouse, S.S., & Hill, C.E. (1999) Clients' internal representations of their therapist. *Journal of Counseling Psychology*, 46, 244-256.

Knox, S., Hess, S.A., Williams, E.N., & Hill, C.E. (2003) "Here's a little something for you" ; How therapists respond to client gifts. *Journal of Counseling Psychology*, 50, 199-210.

Lambert, M.J., & Bergin, A.E. (1994) The effectiveness of psychotherapy. In A.E. Bergin & S.L. Garfield (Eds.), *Handbook of Psychotherapy and Behavior Change* (4 th ed., 143-189). New York: Wiley.

Lambert, M.J., & Okiishi, J.C. (1997) The effects of the individual psychotherapist and implications for future research. *Clinical Psychology: Science and Practice*, 4, 66-75

松崎学（1997）サポート介入による個人の対処行動の変容過程に関する研究．平成7－8年度文部省科学研究費補助金（基盤研究C）課題番号07610157，（代表者：松崎学）研究成果報告書.

松崎学・田中宏二（1998）対人ストレスをもつ児童への合宿によるサポート介入の効果とその母親へのサポートシステム変革へ向けての介入の効果に関する研究．平成7－9年度文部省科学研究費補助金基礎研究(B)(1)：課題番号07301012，（代表者：田中宏二）「健康防御への社会的支援介入法の適用に関する総合研究」研究成果報告書，30-59.

内藤哲雄（1993）職業への態度と変容の個人別構造分析．日本社会心理学会第34回大会発表論文集，46-49.

内藤哲雄（2002）PAC分析実施法［改訂版］．ナカニシヤ出版.

Orlinsky, D.E., Ronnestad, M.H., & Willutzki, U. (2004) Fifty years of psychotherapy process-outcome research: Continuity and change. In M.J. Lambert (Ed.), *Bergin and Garfield's Handbook of Psychotherapy and Behavior Change* (5 th ed. 307-389). New York: Wiley.

Rasmussen, B., & Angus, L. (1996) Metaphor in psychodynamic psychotherapy with borderline and non-borderline clients: a qualitative research. *Psychotherapy*, 33, 521-530.

Rennie, D.L. (1994a) Clients' deference in psychotherapy. *Journal of Counseling Psychology*, 41, 427-437.

Rennie, D.L. (1994b) Storytelling in psychotherapy: The client's subjective experience. *Psychotherapy*, 31, 234-243.

Rhodes, R.H., Hill, C.E., Thompson, B.J., & Elliott, R. (1994) Client retrospective recall of resolved and unresolved misunderstanding events. *Journal of Counseling Psychology*, 41, 473-483.

Rice, L.N., & Greenberg, L.S. (Eds.). (1984) *Patterns of change: Intensive analysis of psychotherapy process*. New York: Guilford Press.

Strauss, A., & Corbin, J. (1998) *Basics of Qualitative Research: Grounded theory procedures and techniques* (2nd ed.). Newbury Park, CA: Sage. （操華子, 森岡崇訳（2004）（第 2 版）質的研究の基礎－グラウンデッド・セオリーの技法と手順　医学書院）

Talmon, M. (1990) *Single Session Therapy*. San-Francisco: Jossey-Bass.（青木安輝訳（2001）シングル・セッション・セラピー．金剛出版）

友生雅夫・今林俊一（2001）児童の友人関係に関する個人別態度構造の分析．鹿児島大学教育学部教育実践研究紀要，11，55-63.

友生雅夫・今林俊一（2002a）児童の友人関係に関する個人別態度構造の分析(2)．鹿児島大学教育学部教育実践研究紀要，12，61-67.

友生雅夫（2002b）児童の個人別態度構造の変容についての研究(3)：クラス編成後一年間の友人関係の変容の分析．日本教育心理学会第 44 回総会発表論文集，313.

Watson, J.C., & Rennie, D.L. (1994) Qualitative analysis of clients' subjective experience of significant moments during the exploration of problematic reactions. *Journal of Counseling Psychology*, 41, 500-509.

矢野恵子（1999）不妊相談における PAC 分析手法の活用効果の検討　治療経過に伴う不妊症の捉え方の変化．三重看護学誌，1，25-38.